



ジュネーブ便り 第1回

IMF本部造船／事務技術職部門担当部長

松崎 寛

マルチリンガル(多言語)

2010年8月、約12年間慣れ親しんだ金属労協(IMF・JC)の職場を離れ、スイス・ジュネーブを所在地とする国際金属労連(International Metalworkers Federation-IMF)に赴任いたしました。松崎寛です。IMF本部での新たな役職は、産業政策・多国籍企業政策グループの造船部門担当部長および事務・技術職部門担当部長です。また、気候変動政策および多国籍企業政策をサポートする役割も担っております。金属労協での経験を糧として、国際労働運動の一層の発展にむけて努力していきたいと思えます。よろしくお願いたします。

さて、本号より「ジュネーブ便り」連載の機会をいただきました。家族とともにジュネーブに移転してから約3カ月が経過し、新たな文化様式のもとでの生活にも序々に慣れてきました。IMF本部での仕事、当地での生活、教育、環境、社会システム、また日本と比べて感じる苦労や楽しみなど、こちらの様子を身近に感じていただけるよう執筆していきたいと思えます。第1回目となる本稿では、ジュネーブでの仕事・生活には欠かせない「マルチリンガル(多言語)」について取り上げます。

さまざまな言語が飛び交うジュネーブの街中

スイスは言語圏の異なる地域から構成されている連邦国家であり、ドイツ語、フランス語、イタリア

語、ロマンシュ語の4つが公用語となっております。私の住むジュネーブは、スイス人口の約2割が話すフランス語圏に属していますが、大半の人々はフランス語を含め最低でも2カ国語、通常で3カ国語を巧みに話し分けることができます。「マルチリンガル」です。言語圏の異なるスイス人同士の会話を聞いていると、どちらかの出身地域の公用言語に合わせるか、そうでない場合は初等教育の段階から学んでいる英語を話しています。また、多くの移民を受け入れてきた歴史的背景から、公用語と英語以外にも様々な言語がジュネーブの街中に飛び交っています。(フランス語しかしゃべれない人もいますが、こうした人はフランスからの越境通勤者であり、スイス人ではない場合が大半です。)



居住する団地

通常の生活では、大抵の場面において英語が通じてしまうため、フランス語を話したり、学んだりする必要を忘れてしまうくらいです。英語を話す医者は容易に見つけることができますし、タクシーで行き先を指示したり、列車の切



符を購入する場合でも、英語で問題ありません。偶然入ったレストランのメニューがフランス語標記のみであっても、英語で料理を説明できるスタッフがいます。商店もスーパーマーケットも然り、フランスからの越境通勤従業員が大半を占めていたとしても、英語で最低限のコミュニケーションをとれる人は大抵見つけることができます。

住宅で瞬く間に広がる我が家の情報

さらに、英語があまり堪能ではないスイス人であっても、フランス語以外に、ドイツ語、スペイン語、イタリア語のどれかをしゃべ

ります。私はジュネーブの一般的なアパート(団地)に住んでおり、隣人にはフランス語と出身母国語をしゃべるドイツ系スイス人、スペイン系スイス人の年金生活者世帯が多く、英語を喋る世帯は、24世帯中、私を除く2世帯のみです。引越当初(というより現在もですが)、隣人とは「こんにちは」くらいの挨拶しかできず、それぞれの世帯と断片的にしか会話できていませんでしたが、私の家族の情報は、英語からフランス語へ、フランス語からそれぞれの母語に訳され、瞬く間にアパート中に広がって行きます。逆に、こちらでは英語しかコミュニケーション手段をもっていない私は、他の家族の情報はほとんど得ることができません。

職場でも英語のみでややもどかしい毎日

職場においても同様です。IMF本部では、27名の役職員が働いており、ほぼ全員が英語をしゃべります。多くのスタッフは、ジュネー

ブ生活圏在住のスイス人、フランス人のため、フランス語も英語と同じくらい使われているほか、スペイン語、ドイツ語をしゃべる役職員も多くなります。職場での役職員間における会話や電子メールのやりとりは、英語とフランス語の併用が多く、フランス語のみ、スペイン語のみの電子メールも事務所内に回覧されます。しかし私の場合、英語のみのコミュニケーションになっているため、英語以外のそれらのヨーロッパ言語会話に入り込んだり、情報に接することができません。ややもどかしい毎日を過ごしています。

「多言語を操る能力」、すなわち「マルチリンガル」になることは、ジュネーブでの生活・仕事に深く入り込む上で必要不可欠です。ジュネーブのスイス人は高等教育、職業教育に加え、多言語を自由自在に操る能力を兼ね備えているからこそ、人的資源として重宝されていると思います。そうであるが故に、ジュネーブは、200以上の国際機関・非政府機関(IMFを含む)、151カ国の政府代表部が集まる世界有数の都市として、大いなる存在感を発揮している。だと実感しています。

まずはフランス語から

今後この地で生活していく上で、私が学んだ最初の教訓は、「日本語ができて生活はできない。英語ができる生活はある程度」できる。フランス語ができる生活の中に溶け込むことができる。加えて、スペイン語、ドイツ語、イタリア語ができると、質量の両面で情報が豊富となり、生活の幅が格段に広がるということ。さて、まずはフランス語から！



松崎 寛 まつざき かん

1998年IMF-FJCに入局。国際局政策局で主任として産業政策、環境政策の立案をはじめ海外労使紛争防止ツールの作成などに活躍。2010年8月1日から家族同伴でIMF本部に赴任。現在の担当役職は、産業政策・多国籍企業政策グループの造船部門担当部長および事務・技術職部門担当部長。